

# 現世祈禱をどのよりに考えますか？

## ● 質問

仏教や浄土真宗では、現世祈禱をどう考えるのでしょうか。

### □ はじめに □

「現世祈禱」は、多様な意味やイメージを持つ言葉ですが、以下では「神秘的な力にはたらくかけて、現世における利益を得ようとするもの※」という意味で、説明を進めたいと思います。

### □ 仏教と現世祈禱 □

まず、初期仏教の中から幾つの特徴的な文例を挙げて、仏教における現世祈禱の問題を考えてみましょう。

『スッタニパータ』には、次のように説かれます。

わが徒は、アタルヴァ・ヴェエダの呪法と夢占いと相の占い

と星占いとを行なつてはならない。鳥獣の声を占ったり、懐妊術や医療を行ったりしてはならない。(中村元訳『ブツダのことは スッタニパータ』、二〇一頁)

### 二〇一頁

『スッタニパータ』という経典は、現存する最古の経典の一つであり、釈尊の語られた言葉を比較的忠実に伝えていられるとされていますが、その中に「呪法」を否定する釈尊の言葉が説かれています。また、呪法だけでなく、占いについて禁止されていることも、注意されるところです。

更に、同じく『スッタニパータ』に、スンダリカというバラモンが、祭祀で用いた供物を釈尊に布施しようとして断られたという物語が説かれています。イン

ドでは、仏教以前にバラモン教という宗教があり、多くの人々によって信奉されてきました。この宗教は、祭祀を中心とする

点に特徴があります。バラモンと呼ばれる聖職者が、生け贄をささげ、呪文を唱える等の方法で利益を求めることが、信仰の中心となつていました。釈尊は、こうした祭祀に用いられた供物を受け取らないことによつて、現世を祈り、現世の利益を求め、あり方を否定されたわけ

です。その意味を以下で考えてみましょう。

□ 縁起の理法から □

仏教の中心的な教義に「縁起」があります。「縁起」には色々な意味がありますが、当初は、諸現象の時間的な因果関係を意味して使われていました。ただ、原因と結果と言つても、何となく因果関係があるように感じられる事柄を意味するのではなく、原因がなくなれば結果がなくなると

いう関係のことを意味しているのが「縁起」です。「十二支縁起」の最後が(生→老死)となつていますが、これは生れるこ

とがなければ老いも死もないという関係を意味しています。この「縁起」を中心的な教義とする仏教においては、例えば祭祀によつて雨を降らせるといふようなことは「縁起」の理法から外れるものであり、釈尊はこの観点から、バラモンによつて執行される祭祀を否定したので

です。

□ 涅槃について □

仏道の最終的な目的は、涅槃に至ることにあります。釈尊は涅槃について、この世において見たり聞いたり考えたり識別した快楽な事物に対する欲望や貪りを除き去ることが、不滅の涅槃の境地である。(同、二二九頁参照)と説かれています。ここには、この現世で認識されるものに対して起る欲望の心を除くことが、

涅槃であると説かれています。

もちろん、多様なあり方をしている仏教を一概に論ずることはできません。ただ、この「涅槃」の意味からも、釈尊が、現世祈禱によつて欲望を満たすことを否定されたことの意味が、十分に首肯されることでしょう。

### □ 真宗における現世祈禱 □

平成二〇年四月一日に施行された「宗制」の「第五章 宗範」には、

本宗門に集う人々は、親鸞聖人の行跡を慕い、常に阿弥陀如来の本願を依りどころとする念仏の生活にいそしんで仏恩報謝に努め、現世祈禱を必要としない無碍の一道を歩むのである。

とあり、念仏者には「現世祈禱」が不必要であると言明されています。また、宗祖の御文にも現世祈禱を否定する内容が散見されます。例えば「悲歎述懐讚」には、

かなしきかなや道俗の良時・吉日えらばしめ天神・地祇をあがめつと占祭祀つとめとす

(六一八頁)

とあります。日の善し悪しを問ひ、吉凶を占ひ、祭祀を行うことを宗祖は嘆いていらつしやいますが、冒頭の「道俗」という表現には、「仏教者でありながら」という批判の意が込められています。つまり、宗祖は仏教の本義に基づきながら、占術・祭祀を否定したので

です。『スッタニパータ』との類似からも明らかのように、約二五〇年前の釈尊の教えが、仏教の透徹した精神として、宗祖まで変ることなく受け継がれていることを、ここに見ることができ

るのです。

□ 現世利益 □

仏教の歴史において、現世の自己中心的な福徳を祈ることが否定されてきたことを確認してきましたが、現世における利益

が否定されている訳ではありません。

『教行信証』の「信文類」には、「正定聚の益」をはじめとする十種の益が挙げられ、『浄土文類聚鈔』の「念仏正信偈」には「現生無量の徳を獲」(四八六頁)と説示されています。ただし、これらの利益は、あくまでも信心をたまわつたものに恵まれる利益として挙げられているものです。もし、これらの利益を求めてお念仏するならば、「高僧和讃」に、

仏号むねと修すれども 現世をいのる行者をば これも雑修となづけてぞ 千中無一とさらはるる

(五九〇頁)

とあるように、雑修の念仏となつてしまいます。弥陀の真実の願いをいただく私たちは、現当二益を既にたまわつてい

るので、願いを発する必要はないので

す。

□ おわりに □

仏教は、その当初から、欲望こそが私たちの苦の原因であるとし、それを乗り越える処方として、一時的充足になつたとしても、本当の安心をもたらすものではないと説かれています。また、釈尊は「たらしきによつて正定聚に入る」という現世の利益を恵まれた私たちは、そのはたらしきに撰取されている中に、自らの持つ欲望を慚愧せしめられ、お浄土へ生れるという本當の安心を頂戴しているのです。

(教学伝道研究センター 常任研究員 藤丸智雄)

※「祈禱」には神仏との交歓の意もありますが、ここでは「現世」という言葉と熟語となつていて、「いのり求める」という古くからの意味で解釈しています。